埼玉大学紀要　教育学部，59(1)：43-54（2010）

中学校での職場体験の意義
―高校生と大学生へのインタビュー調査から―

五島　萌子*・重川　純子**

キーワード：職場体験、中学校、インタビュー調査

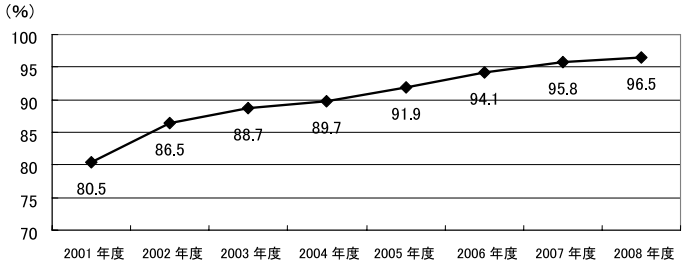
Ⅰ　はじめに

若年者の失業率は1980年代から他の年齢層に比べ高い水準にあったが、1990年代以降の失業率の上昇や1990年代後半からのフリーター、ニートの増加により若年者の雇用や就業が深刻な社会問題として取り上げられている。経済状況や雇用環境の悪化のしわ寄せが若者に強く表れた結果であるが、学校卒業後就職できた場合にも、卒業後３年以内という就職して比較的短期間での離職率が高く、「753」（中学卒業では７割、高校卒業では５割、大学卒業では３割が学卒後３年以内に離職しているという調査結果から）と表現される状況に対し、マッチングの問題だけでなく、若者自身の職業や労働に対する意識の問題が指摘されている。このような中、子どもの頃からのキャリア教育の必要性が唱えられ、キャリア教育の一環として中学生の職場体験が拡がりつつある。職場体験プログラムの評価として、職場体験の実践報告では、受け入れ先の事業所、保護者の意見として肯定的な評価とともに課題・要望が取り上げられているが、生徒の意見としては肯定的なものが中心である。本研究では、中学校で職場体験を行った者に対してインタビュー調査を行い、生徒の側から職場体験の実態を捉え、職場体験の意義、有意義な職場体験につながりうる事項、プログラム実施上の課題を明らかにする。

Ⅱ　「職場体験」プログラム

高度経済成長期以降就業構造が大きく変わり、自営業、家族従業としての就業から雇用者としての就業が大多数を占めるようになっている。日常生活の中で親が仕事をする姿をみたり、親から仕事についての話を聞く機会が少なくなっている。このような状況に鑑み、広く社会の中で仕事や働くことについて学ぶことのできる教育の推進の必要性が唱えられており、企業や官公庁などで子どもが親の働く姿を見学する機会を供するような職場もみられる。学校教育において職業指導は戦前から行われており、近年は特別活動や総合学習の時間において将来つきたい仕事や働くということについて考えたり、調べたりすることが行われてきていた。2003年には、文部科学大臣他、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣連名で、政府として「若者自立・挑戦プラン」を発表し、その具体的な政策の１つとしてキャリア教育が挙げられた。2004年１月発行の『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』

* 埼玉大学大学院教育学研究科修士課程
** 埼玉大学教育学部家政教育講座



（文部科学省「中学校職場体験ガイド」、国立教育政策研究所生徒指導研究センター「平成17～20年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）」より作成）

図１　全国公立中学校における職場体験実施率の推移

（文部科学省）では、キャリア教育とは「端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」」と定義し、この冊子の趣旨を踏まえ学校においてキャリア教育の振興・充実を呼びかけている。その取り組みの１つとして職場体験が挙げられている。2002年度には既に公立中学校の86.5％で実施されていたが、先進的に実施されていた職場体験を参考に、2005年度には中学校での５日間以上の職場体験を推進する「キャリア・スタート・ウィーク」が始まった。2008年度の実施校のうち５日以上の学校は２割に満たず、１日や２日の学校も少なくないが、１日でも実施している学校の実施率は上昇傾向にあり、2008年度には96.5％である（図１）。職場体験では、働くことの厳しさや喜びを実感し、その意味を学ぶ経験を得ること、集団の中で自己の位置や役割を自覚しながら人間関係を築く経験を得ることなどが期待されており、望ましい職業観・勤労観が育まれるとされている（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）。同報告書では、「望ましさ」について、「一律の「職業観・勤労観」を教え込むことではなく、生徒一人一人が働く意義や目的を探究し、自分なりの職業観・勤労観を形成・確立していく」とし、働き方、生き方などに多様な選択肢がある現代において、個々人が主体的に生き方について考える機会ともなる。

Ⅲ　研究方法

１　調査対象

埼玉県内の高等学校、大学に在学する学生13名（高校生７名、大学生６名）を対象に、中学校時代の職場体験について調査を実施した（但し、中学校時代の居住地は必ずしも埼玉県とは限らない）。大学生の調査対象者については、筆者らの知人、知人の知人で中学校で職場体験を実施した者に調査の趣旨・概要（中学校の時の職場体験について面接調査）を説明し、調査協力を了承してくれた方を対象としている。高校生の調査対象者については、卒業後の進路として進学・就職に著しい偏りがない高等学校に調査協力を依頼した。高等学校の先生が生徒に調査の趣旨・概要（中学校の時の職場体験についての面接調査）を説明し、自ら協力を申し出てくれた方である。体験から時間を経ることは、詳細な事項については記憶があいまいになっている可能性はあるが、体験直後の熱の冷めない状態ではなく、体験を客観的に捉えられるようになるとともに、印象に残ったことが整理され記憶されていると考えられる。また、進路についての選択時期がより間近となり、職場体験が進学・就職についての検討やその他の生活に何らかの影響を与えているかの自己評価が可能であると考えられる。対象者の概要は表１の通りである。

表１　回答者一覧

	学年	性別	体験時期	体験期間	体験場所	体験内容	体験先の選び方	中学生当時の将来の夢
A	大４	女	中２	５日（初日は学校で事前指導）	幼稚園	園児がいる間はクラスに入り、先生の横について過ごした。園児が帰ったあとは掲示物作りの手伝い	グループを組み、自分たちで体験先を選び、電話をかけて約束を取り付けた。自分の卒園した園であったため連絡しやすかった。	臨床検査技師
B	大４	女	中２・夏休み	１日	保育園（母親の勤務先）	主に園児と遊ぶ	興味のあるところが保育園で、保育園に勤めている母親の伝で、受け入れてもらった。	学校の先生か保育園の先生
C	大４	女	中２・９月頃	３日	幼稚園	園庭のごみ拾い、砂場の土おこし、園児と外で遊ぶ、色水遊びの手伝い等	調査用紙が配布された。学校側が用意した体験可能な場所のリストの中から選んだ。第１希望だった。	幼稚園の先生
D	大３	男	①中１ ②中２	各１日	①駄菓子屋兼軽食店 ②スーパー	①そうじ、たこ焼き作り、ジェラート作り ②製菓・精肉・惣菜等各コーナーの荷出しや陳列	学校側が用意した体験可能な場所のリストの中から選んだ。どちらも第１希望の場所だった。	特になし
E	大４	男	中２	１日	ＦＭラジオ局	掃除、番組の収録	学校側が用意した体験可能な場所のリストの中から選んだ。	公務員か会社員
F	大４	男	中２・夏	半日を３日間	釣具屋	商品の陳列、整理、掃除	学校側が用意した体験可能な場所のリストの中から選んだ。	発明家
G	高２	男	中１	３日	和菓子屋に併設された工場	主に商品の袋詰め、箱詰め、シール貼り	友人２人と一緒に３人のグループを組み、学校側が用意した体験可能な場所のリストの中から選んだ。余っていた和菓子工場を選んだ。	特になし
H	高３	女	中１・初め頃	３日	ペットショップ	発注して届いた商品に日付シールを貼る、新しい商品は奥に、古い商品は前のほうに陳列するなどの商品整理	体験可能な場所のリストの中から選んだ。第１希望は飲食店で、第２希望がペットショップだった。	養護教諭
I	高３	男	中２・秋	３日	小学校	主に授業の補助、子どもたちと遊ぶ	学校側が用意した体験先のリストの中から選んだ。	警察官
J	高３	男	中２・９月	５日	スポーツセンター	センター内の掃除、事務、指導者の補佐、レジ打ち	学校側が用意した体験先のリストの中から選んだ。保育園を希望していたが、人数調整のため第２希望の場所になった。	弁護士
K	高３	女	中１・２学期	３日	市民図書館	返却された本を書棚に戻す、図書に透明な保護シールを貼る等の作業	希望する職業ごとにグループを組み、自分たちで体験先に職場体験受け入れ依頼の電話をかけた。	ピアノの先生
L	高３	男	中１・秋ごろ	４日	運送会社	ものの移動、ごみ処理	学校側が用意したリストの中から選んだ。第１希望は小学校だったが、第２希望の運送会社になった。	特になし
M	高３	女	中２・11月ごろ	３日	保育園	園児と遊ぶ	自分の卒園した保育園。自分たちで電話で連絡し、受け入れてもらった。	幼稚園の先生

2　調査方法・内容

調査は１対１の面接方式で実施した。職場体験の体験内容を自由に語ってもらう中で、話の流れに応じた下記の質問事項を尋ねる半構造化面接法を実施した。インタビュー内容は、調査対象者の許可を得た上で録音し、テキストデータ化し分析を行った。調査内容には、文部科学省作成の『中学校職場体験ガイド』で職場体験の教育的意義として挙げられている「望ましい勤労観、職業観の育成」、「学ぶこと、働くことの意義の理解、及びその関連性の把握」、「啓発的経験と進路意識の伸張」、「職業生活、社会生活に必要な知識、技術・技能の習得への理解や関心」、「社会の構成員として共に生きる心を養い、社会奉仕の精神の涵養」を踏まえ、「働く」ということをどのように捉えているのか、体験後の意義・行動等の変化を含めた。

質問項目は以下の通り：

１．中学生の頃の将来の夢

２．職場体験活動の状況（時期、期間、仕事内容、体験先の選び方）

３．職場体験活動に対する意見、感想等

・体験にあたりこれは知りたい、確かめたいなどの目標を持っていたか。

・やりがいの有無。もしあれば、どのようなことにやりがいを感じたか。

・体験した職業が自分に向いていると感じたか。

・働く上で大切だと思ったことはあったか。

・不安だったこと、困ったことなどはあったか。もしあればどのように対処したか。

・体験前または体験中、体験後に、体験先の方からの仕事に関するアドバイスの有無。

・職場体験を通して自分のことについて新たに、もしくは改めて気づいたことはあるか。

・職場体験をしてみて物の見方や生活の仕方など自分の中で変化したことはあったか。

・将来の夢や希望の実現に向けて、意識や態度などで変わったことはあったか。

・体験について家庭で話をすることはあったか。

・行く前と行った後で体験した職業や仕事をすることについてギャップはあったか。

・職場体験についての不満や要望など。

４．職場体験についての事前学習、事後学習の有無とその内容。

５．現在の状況

・職業や働くということについて学んだり考えたりする機会はあるか。

・現在アルバイトはしているか。

・現在の夢

・現在就きたいと思っている仕事に職場体験が何らかのかたちでつながっていると思うか。

・働くとはどんなことだと思うか。

3　調査期間

2008年５月～11月

Ⅳ　結果及び考察

1　体験内容の概要

体験した職場、体験内容、体験先の選び方は表１の通りである。体験した職場は、幼稚園、保育園、小学校、駄菓子屋兼軽食店、スーパーマーケット、ラジオ局、釣具店、和菓子製造工場、ペットショップ、図書館、スポーツセンター、運送会社と様々である。体験内容については、学校・保育園以外では、商品の陳列、箱詰め、掃除など体を使って行うことが多い。

体験期間は、３日以上であったものがほとんどであった。１日だけの場合から事前指導を含め５日間のプログラムが組まれている場合もあった。

体験先の選び方は、体験者自らが行きたい職場を探して許可をもらう場合と、学校が受け入れの許可をもらい用意した職場の中から行きた

い場所を選ぶ場合とがあった。後者の場合、希望した職場に行けなかったという者も見られた。

2　職場体験により育まれる能力

職場体験は、単に職業についての理解を深めるだけでなく、体験を通して社会を知り、日頃接することのない他者と関係を持ち、日頃行わないような行為をすることで働くことに限らず視野を広げる機会になると考えられる。寺崎（2009）による富山での中学生の職場体験による学習効果の研究では、体験プログラムによる様々な体験が更なる学習への動機に結びついていることが指摘されている。

『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』（国立教育政策研究所、2002）では、職場体験で育まれると期待される能力として、①人間関係形成能力：〈自他の理解能力〉〈コミュニケーション能力〉、②情報活用能力：〈情報収集・探索能力〉〈職業理解能力〉、③将来設計能力：〈役割把握・認識能力〉〈計画実行能力〉、④意思決定能力：〈選択能力〉〈課題解決能力〉の４つの能力項目とその下位項目が挙げられている。それら各能力について、同報告書中「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）－職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から」には、学齢段階別に具体的事項が例示されている。『中学校職場体験ガイド』（文部科学省、2005）では、生徒にとって職場体験は、①勤労観、職業観の育成の場、②新たな自分を発見する場、③コミュニケーション能力、社会的スキルを身に付け、人間関係の大切さを体得する場、④学校と社会をつなぐ場、⑤職業生活や社会生活に必要な知識、技術・技能を学ぶ場の５つの場として、その意義を示している。２つの報告書で示される能力から、共通している項目として、以下の３つの能力分類、その下位項目として５つの能力に整理した。

人間関係形成能力…〈自他の理解能力〉〈コミュニケーション能力〉
情報活用能力…〈職業理解能力〉
将来設計能力…〈役割把握・認識能力〉〈計画実行能力〉

3　職場体験により育まれる能力との関連事項

前項で抽出した能力が、職場体験プログラムの中のどのような体験により獲得される、あるいは獲得につながりうるか、ヒアリングデータの中から能力に関わると考えられる発言の場面を取り上げ、その場面に関係する事項を検討した。先に挙げた５つの能力「自他の理解能力」、「コミュニケーション能力」、「職業理解能力」、「将来設計能力」、「役割把握・認識能力」、「計画実行能力」のうち、「役割把握・認識能力」の場面については、今回のヒアリング調査からは抽出できなかった。

以下にインタビュー回答者の語った内容を取り上げるが、回答者の発言そのままでは意味がわかりにくい場合、（　）内に言葉を補って表記している。

（１）自他の理解能力

将来の希望として幼稚園教諭を考えていて幼稚園で職場体験を行ったＣ（事例１）は、仕事について「向いていないとは思わなかった」「どちらかと言うと向いているかなと思いました」と言っている。また、職場体験を通して、「改めて、小さい子が好きで一緒にいたいという気持ちが強くなったと思う」とも言い、自分は子どもが好きなのだということを再確認している。子どもたちと関わる中で自分には向いているかもしれない、実際に将来仕事に就きたいと思いつつも、幼稚園教諭として働くには子どもたちを観察する能力や周りに細かく気を配る能力が必要であると感じ、自分自身はその能力が不足していると確認していた。体験を通して体験した職業そのものだけでなく、職業に必要とされる能力を感じ取り、自身の能力と突合せて自己を再認識しており、それは職業理解にもつながっていた。一方で適性を検討できなかった者もおり、職業適性の把握には個人差があった。

仕事を通して自分が誰かの役に立つという役立ち感を持つことで、やりがいを感じ、肯定的に適性を判断している者もいた。

事例１

インタビュアー：体験してみて、えー、体験した職業についてやりがいがあるなぁと感じましたか。３日間で。

回答者Ｃ：うーん、やりがいがあるなぁ、って思いました。そうですね、やっぱり、最後、一日の終わりになってというか、はい。そうですね、ずっと居たいじゃないけど、そういうのがあったので。絶対（幼稚園教諭に）なろうとそのとき思った記憶があります。

インタビュアー：具体的にどのようなことにやりがいを感じたと思いますか。

回答者Ｃ：うーん、私たちは数日間ぽんって居ただけなんですけど、長期間（子どもの）成長を見られるっていうのは、すごい、うん、やりがいあるし、うれしいことだなぁって思いました。

（中略）

インタビュアー：では、幼稚園で働くっていうことについて自分に向いているかなぁっていう風には感じましたか。

回答者Ｃ：うーん、向いてないとは思わなかったかな。うーん、やっぱり子どもが好きなんだろうなっていう風に思ったので、どちらかというと向いているかなって思いました。

（中略）

インタビュアー：働いている幼稚園の先生であったり、実際に自分が仕事をしてみて、働く上で大切だって思ったことはありましたか。

回答者Ｃ：えーと、先生がどう動いていたかという記憶はあまりなくて、でも幼稚園ではみんな好きな遊びっていうのが基本なので、端から端まで目を行き届かせるにはすごい大変だなって思って、広い視野というか、気を配らなくちゃいけないかなぁと思いました。

（２）コミュニケーション能力

本調査の調査対象者の職場体験の場所は、学校、販売業、サービス業など対人、接客を仕事内容に含むものが少なくない。事例２のＪは、スポーツセンターでの職場体験で、受付業務等を行っている。１回限りの利用ではなく、頻繁に利用している方が多いため、いつもは見かけない働いている子どもに声をかけてくれる常連の方々がおり、その方たちとの会話が気持ちの張りをもたらしていると考えられる。

常連客や体験先で働いている方との会話や交流から、働く喜びが見出されていた。また、体験前には人見知りを気にしていたが、人（子ども）と接する仕事を選んだＭは、体験中に職場の方から受けた幼児との接し方のアドバイスを参考にして子どもとうまく関わることができたことが人と接することへの自信になっていた（事例３）。職場体験で様々な年代の人と接する経験が、その後の生活の中で他者と接していく自信にもなりうることが示唆された。

地域社会の関係が希薄になり、日常的には極めて近い関係内、同年代の友人のみとの交流が中心であるが、職場体験プログラムでの体験が関わる相手の幅を広げ、他の世代とのコミュニケーションの契機となる。職場体験の仕事内容が直接的に即コミュニケーションの技法を高めるわけではないが、同年代に限らず様々な世代とも関わることの楽しさを実感することが、自ら交流機会を持ち、コミュニケーション能力の向上につながりうると考えられる。

事例２

インタビュアー：スポーツセンターでの仕事はやりがいがありましたか？それともありませんでしたか？

回答者Ｊ：やりがいはものすごくありました。

インタビュアー：どのようなことにやりがいを感じたんですか？

回答者Ｊ：やりがいはお客さんとの会話ができるというところです。おばちゃんから声かけられやすい顔らしいです。

インタビュアー：おばちゃんか。そうだよね、中学生来てたら。

回答者Ｊ：いきなり、お兄ちゃん見かけないねぇ、って話しかけられました。

インタビュアー：ふーん、会話は弾みましたか？

回答者Ｊ：弾みました。名前も、その当時は覚えてたんで。あ、レジでカード預かってるんで、名前見とかないと、困るんで。まぁそういうのもあって、よかったです、会話できたの。みんな優しくしてくれました。

事例３

回答者M：アドバイスかわからないんですけど、（子どもを）昼寝をさせる前とかに、こう、パジャマに着替えさせたりするんですけど、なかなか着てくれなかったり、こう、寝てくれなかったりしたんで、そういうときの（体験先の保育士からの）「一緒に寝てあげるとすぐ寝るよー」とか、歯磨きするときに「歌歌ってあげながらやると喜ぶよー」とか、そういうのはありました。

インタビュアー：実際やってみたんですか、それは。

回答者M：はい、ちょっと恥ずかしかったんですけど、歌いながらやってあげたりしたら。何か、何歌って良いかわからなかったんで、何歌ってほしいって（子どもに）聞いたらアンパンマンとかって言ってくれたんで、分かるやつだったんでちょっとよかったなぁって。

インタビュアー：（笑）へー。やってみたら喜びました？

回答者M：もう、笑顔で、笑顔で。何かあんまり口開かない子とかいたんで、あーんしてって言って歌ってあげたら素直に聞いてくれました。

（中略）

インタビュアー：職場体験を自分のことについて通して新しく、もしくは改めて気付いたことはありますか。

回答者M：小学校のときはすごい人見知りだったんですよ。～中略～人見知りがなおったというか、そっから人との交流がすごい好きになって。何ていうんだろう、今まで年上の人との交流が多かったんですけど、こう、職場体験行って小さい子と交流できたんで、幅広く交流できたのがいいかな、よかったかな～。

（３）職業理解能力

「自他の理解能力」の項で述べたように、体験している仕事に自分が向いているかを考える場合には、何かしら仕事の内容、必要な資質や能力を考えることになる。

普段は表面的に見えている仕事だけでなく、見えていなかった裏方の仕事を知ることで、体験した職業の実像を垣間見ることにつながっていた。役割把握・認識能力にも通じるが、職場体験を通して、働くことにはその職業ならではの責任が伴うことに気付いている者もいた。

事例４のＧは和菓子工場で箱詰めや袋詰めなどの作業を行った。消費者としては気付くことがなかった製造の実際の作業内容を知っただけでなく、「ベテランは（作業が）スムーズ」と仕事に熟達している人がいることに気付き、「一人一人が何か責任を持って働いてる」ことや連携することが仕事をする上で大切であると感じている。事例５のＫは図書館で受付や本の整理などの仕事を行っているが、働いて心身ともに疲れることで、働くことの大変さを感じ、その実感を通して働くということを考えたり、働いている家族を敬う気持ちや感謝の気持ちにつながる場合もあった。他の対象者の中にも、普段家で疲れた姿をみることの多い親やきょうだいなどに対し見る目が変わったと語る者がみられた。

企業等に勤める人が増え、現代の子どもたちは家族など近しい人の働いている姿さえ直接目にすることが少なくなっている。マスメディアなどを通して多様な職業に関心を持つ機会はあるかもしれないが、それらは職業についての断片的な知識を得るにとどまることが多い。職場体験も極めて限定的ではあるが、直接的な体験の中で得た職業への理解が、働いてくれている家族などがいるからこそ自分の生活が成り立っていると感じるようになったり、働くことへの価値を見いだすことにもつながりうると考えられる。

事例４

回答者Ｇ：俺が行ったところは店とつくってる工場が一緒のところ（和菓子工場）で、そういうところはなかなか多分ないと思うから、いつも行ってるところしか見ないけど、つくるところはどういうところなんだろうなぁっていうのはありました。

インタビュアー：ふんふん。で、んーと、じゃあ、その確かめたいなぁと思ったこと、どういう風に作ってるんだろう、って行って実際に見てみて、どのように感じましたか。

回答者Ｇ：んー、中の人たちは、こうもうベテランの人が多くてスムーズに作業が流れていく。すごい、裏ではこういうことがあるんだと思った。

（中略）

インタビュアー：職場体験をしてみて、働くとはどういうことだと思いました？

回答者Ｇ：んー、働くとは、どういうことか……。みんな、上にたつ人はちゃんと……上に立つ人が一番責任があると思うし、まぁ下の人たちもしっかりとお互い信頼しあってちょうどいいのかな。……働くってことは……んー、生きていくために、（笑）食っていくために必要なこと。

事例５

インタビュアー：職場体験をしてみて、ものの見方や生活の仕方など、自分の中で変化したことはありましたか。

回答者Ｋ：やっぱり、あのー、いつも働いてくれている父のこと、父にすごく感謝したのと、はい、毎日すごいなぁというふうにすごく思うようになりましたね。

インタビュアー：やっぱりなんだろう、働いてみて、大変だというか、疲れたなぁと思ったり。

回答者Ｋ：はい、そうです、それで。

（中略）

インタビュアー：働くとはどんなことだと思うかっていうのを自分なりに（教えてもらえますか）、はい。

回答者Ｋ：そうですね、生きていく上で必ず必要なものでもあって、やっぱりこう、何かをこう食べていくためとか、家族を養うとかそういういろいろ基本的な理由があると思うんですけど、その他にも人とのふれあいですとか出会いがあるので、うーん、ほんとに人にとって必要なものだなと思いましたね。

インタビュアー：ふーん。必要なもの……。Ｋさんは働きたいと思う？。

回答者Ｋ：そうですね、働きたいですね。

インタビュアー：人とのふれあいとか出会いっていうのは、あれですか、何かその職場の人とか？

回答者Ｋ：そうですね、職場の人だったり、あとやっぱりこう（図書館に）来る人だったり。

（４）計画実行能力

図書館で働いたＫは、体験前は「仕事がちゃんとできるか」不安だったが、体験してみて「自分でも仕事できるんだ」と「希望が持てた」と言う。また体験後には、個人的に「自分は何になりたいのかなぁ」と考えるようになり、「視野が広がった」と思っていたと振り返って

いる。「(自分が) 働く姿を想像」したとも言っており、将来についての希望を膨らませていたことがうかがえる。具体的にどのような場面で感じたかということは覚えていなかったが、働く上で大切だと思ったこととして、「(やらなくてはいけないと思うのではなく) 自分からすすんで (仕事を) やる」「前向きにやる気をもって (仕事をする)」ということを挙げている。実行段階までは確認できなかったが、体験を通して働くことに自信を持ち、将来のことを前向きに考えるようになったり、将来の夢の実現のための計画を立てたりすることにつながっていた。

事例 6

インタビュアー：職場体験を通して自分のことについて新しく、もしくは改めて気付いたことはありますか？

回答者K：そうですね、改めて本は好きだなと思いましたね。はい、ほんとにこういう本に囲まれた仕事ができたら素敵だなぁと思いましたね。はい。

インタビュアー：本が好きだったのは結構ちっちゃい頃からだったんですか？

回答者K：そうですね、小学校あたりには (図書館へ) ほんとによく行っていましたね。

インタビュアー：なるほどね。えっと、じゃあ、その次は、将来の夢や希望などの実現に向けて意識や態度などでかわったことはありましたか？

回答者K：そうですね、やっぱり、ほんとに、んー、今まで、ほんとにこう、ちゃんと職場に行って体験をして、自分でもこういうふうに仕事ができるんだなというか、そういうものを通してやっぱり希望は持ちましたね、自分の将来。はい、そういう風に、楽しく充実した日々が送れればなと。

インタビュアー：なるほど。Kさんにとって、その職場体験は楽しく充実した3日間 (だったということですね)。

回答者K：はい、そうですね。

4　職場体験プログラム実施上の課題

職場体験プログラムについて、ヒアリング内容から抽出された課題として以下の4点が挙げられる。

(1) 仕事内容

仕事内容が簡単すぎたり、苦労を伴わない場合、働くことの厳しさや喜びは感じにくい様子がうかがえた。中学生は、自分の能力を試したい、大人と同じ仕事がしてみたいなどと向上心を持つ時期であり、「もっと仕事らしい仕事をさせてくれてもよかった」と自分の能力に見合わない仕事内容への不満を漏らす者もいた。学校側と体験先が連携しあい、生徒が満足できるような仕事内容を検討していく必要があろう。そのためには生徒の実態を踏まえた細やかな職場体験プログラムを組んでいくことが課題であると考える。

事例 7

回答者D：駄菓子屋のほうはおじいちゃんとかおばあちゃんがやっているような店だったのですごい適当で、何か座ってたりとか、裏で座ってだらだらしてたりとかしても全然だったので。職業体験って言えるのかっていうかんじで。たこ焼きとジェラート食わしてもらっただけって感じなんですけど。

事例 8

回答者E：(職場体験に対する) 不満はありますね。もっと仕事らしい仕事をさせてくれてもよかったかなって今は思いますね。わかんないですけど、そのー、わりと、(ラジオDJの) 収録15分と、午前中は掃除とかはあったんですけど、わりと何もしてない時間が多かったんですよ。ほったらかしにされてるというか。何々について考えておいてって言ってそのまま何もないとか、何かもっとFM局の人

がやってる仕事を体験させてもらえたほうがよかったんじゃないかなと思います。

インタビュアー：そのー、普段の仕事を見ることとかはできたんですかね？

回答者E：いや、見てもいないですね。

（2）体験期間

本調査の対象者は3日以上がほとんどで、4日間の体験をした場合でも、職場体験を「一過性の」「行事みたいな」体験でしかないと捉えている場合もあったが、期間が数日間に及ぶ場合、初日は慣れない場で過ごすことに疲れてしまうものの、日が経つにつれ仕事に慣れ、職場の方との会話も弾むようになり、体験を楽しいと感じるようになっていた。3日間の体験者からは「疲れたけどできればもっとやりたかった」と言う声が挙がった。体験に積極的に取り組む意欲が出てきたところで終了し、長く体験できていれば職業理解等が何かしら違うものになったのではないかと推察された。半日や1日など短い場合には、「（体験した職業に）向いているか分からない」と、自己の職業適性を考えるまでの体験とはなりにくいようであった。また、「（職場の方に）歓迎されていないようだった」と感じた者もおり、体験先の方が職場体験を積極的には受け入れていない場合もあった。『中学校職場体験ガイド』などには事業者にとっての意義も示されてはいるが、受け入れの余裕がなく、受け入れた場合にも時間が限られており説明の時間を十分にとったり、仕事内容を充実させることができず、生徒は歓迎されない「客」の状態として時間を過ごすことになってしまっていたと推察される。

（3）職場体験の時期

13人の調査であり、個人差があるが、体験時期が中学1年生の場合、体験を学校生活やその後の職業生活につなげて捉えることが難しく、体験を通した自己の変化等にも気付きにくい傾向が見られた。

（4）職業理解・職業適性の把握

次項の事前・事後指導とも関連するが、回答者は身近な友人との会話の中で他の職業と比較検討をすることはあるものの、検討の範囲は狭い。職場の仕事のある部分のみを体験して感じた大変さの程度や具体的な業務内容だけから「大変そう」「楽しそう」などと述べており、表面的な比較になりがちであった。

5　学校による事前、事後指導

事前指導として記憶されている内容の中心は、「来年から職場体験できなくなるからちゃんとするように」、「後輩が行けなくなるからちゃんとしなさい」、「協力を得て行かせてもらっているので、ちゃんとやれ」、「体験先の人は怖い（からマナーには気をつけるように）」といった仕事の基本姿勢というより、協力関係維持のための「きちんとした態度」の指導と回答した者が多かった。「職場体験ていう行事」「一日なんで遠足気分」などの言葉から、体験に行く目的を十分に理解できていない者も見られ、生徒が明確な目標を持てるような働きかけの必要があることが示唆された。

事後指導は必ずしも実施の記憶のない者も少なくなく、実施されている場合の内容は、お礼状を書く、感想文を提出する、グループごとにまとめて発表するなどであった。感想文を提出するだけの場合、体験の振り返りは個人の中で完結してしまうことが多い。感想文の提出のみの場合でも、友人と個人的に情報交換をすることがあるようだが、それでは検討の範囲に限りがあり、多様な職業を知る事にはつながりにくい。グループでまとめて発表するなど他者と体験を共有する機会が設けられている場合、自分が体験した職業以外への興味を持つきっかけや職業の多様性や様々な働き方や生き方を知る・考えるきっかけにもなりうる。

Ⅴ　まとめ

本研究では、職場体験プログラムを経験して一定の時間を経た後に体験を振り返ってもらう

ことにより、職場体験プログラムを評価した。本研究では13事例を対象としており、これまでに示した結果は必ずしも回答者全員に共通して見られたものではないが、どのような体験をすることが有意義な職場体験につながりうるのかという仮説提示として、以下に結果をまとめる。

職場体験プログラムは、体験直後の余韻のある時期の感想としてだけでなく体験から時間を経て振り返った場合にも、生徒が働くことの厳しさや喜びを知り、働くことについて考える機会であったといえる。また、単に働くということだけでなく、職場で働く人やその他職場で接する人との関係・交流から自分や他者を理解したり、コミュニケーションの取り方を学習する機会にもなりうる。しかし、体験期間が短い場合や体験できる仕事の内容が中学生には軽い場合には単なるイベントでしかなく、意図する能力の獲得にはつながりにくい。現在も全国的には１、２日の実施が多いが、期間を延長することが難しい場合には、事前・事後指導を含め全体的なプログラムとして職場体験を捉えた実施等、実施の仕方を考えることが課題である。生徒にとって有意義な体験にするためには、「中学生が意欲的に取り組める仕事内容」「役立ち感」「適当な体験日数と時間」「あたたかな交流」「会話の弾む職場」の５つが重要な要素になると考えられる。これらを考慮しながら体験先と学校とが連携して職場体験の内容を検討していくことが必要であろう。また、事前指導、事後指導は必ずしも十分とは言えず、事前指導では、生徒が職場体験をする目的を理解し、体験する職業に興味関心を持ち、明確な目標を立てられるような働きかけ、体験後には、他者と体験を共有する機会を設け、働くことや多様な職業へ興味を広げていくことが重要である。

職場体験の公立中学校での実施率は、概ね全実施となっており今後日数の延長が推進されるとすると、多忙化している学校にのみ体験先確保の責任を負わせることは更なる多忙化や、事前指導での協力先の維持の強調につながりやすい。既に指摘されているように（例えば、児美川（2007））、協力体験先の確保に通り一遍の呼びかけや意義の周知だけでなく、制度的な裏付けが必要である。

引用・参考文献

児美川孝一郎（2007）　日本における「キャリア教育」実践の展開（２）―文部科学省『中学校職場体験ガイド』の検討―，法政大学キャリアデザイン学会紀要，３－18

寺崎里水（2009）　富山県「14歳の挑戦」に見る職場体験の現状と課題，日本労働研究雑誌，588，44－54

辻野智二・東誠（2007）　熊本市における中学生の職場体験「ナイス・トライ」事業の現状と課題，熊本大学教育学部紀要人文科学，56，147－154

文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2004）　キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために～

文部科学省（2005）　中学校職場体験ガイド

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）　児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2006）　平成17年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2007）　平成18年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2008）　平成19年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2009）　平成20年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2008）　「キャリア教育」資料集一文部科学省・国立教育政策研究所一研究・報告書・手引編平成19年度増補版

（2009年９月30日提出）
（2009年10月16日受理）

What makes work experience program in junior high school effective?

Moeko GOTO and Junko SHIGEKAWA

Keywords : work experience program, junior high school, interview survey

Recently, the work experience program in junior high schools is spreading all over Japan in order that students get views on occupation and works. The purpose of this study is to clarify the value of this program and its determinants of effectiveness. We conducted interview survey to informants who experienced the work experience programs in junior high school from 2000 to 2004. We have found that the followings are important to make the program more effective: adequacy in term and difficulty, the feelings that participants have made a positive contribution, conversations with workers, and interactive relationships. Furthermore it is important to share experience with other participants after its program. We also found that the program provides junior high school students with good opportunities to consider their occupations and works in the future.